

雷を神に祭る 平出の雷電神社

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



祭礼の機はためく雷電神社



参道での勇壮な梵天もみ

宇都宮商工会議所は、「宇都宮雷都物語」の名のもとに名産品創出の取り組みを展開している。「雷都」は、英語のLightに通じ宇都宮市の軽やかなイメージを醸し出しているが、雷の多い所から名づけられたところでもある。

宇都宮市は、夏季に限ってみると全国の県庁所在地では熊本市に次ぎ雷の多い所である。ちなみに三番目は、同じ北関東の前橋市である。北関東で夏季雷が多いのは、関東平野の奥に位置し、かつ背後に二〇〇メートル級の山地を控えることによる。晴れた日の日中、太陽の熱で温められた空気は、上昇気流となり、その上、日中吹く南風は、山地にぶつかり強制的に上昇気流を生じる。こうして生み出された上昇気流が、巨大な積乱雲となつて雷雨を発生させるのである。

表とされてきた。落雷は時に人命を奪い、火災を発生させ、雷に伴う突風や降雷は、農作物等に甚大な被害をもたらす。しかし、一方では「干天に慈雨」の言葉のように恵みの雨をもたらしてもくれる。夏季に雷が多い地域にとつて雷は、畏怖の対象であると同時に豊作をもたらすものとして信仰されてきた。そうしたことから栃木県内では、雷を「雷様」と尊称をつけて呼ぶ習わしがあり、また、雷神を祭る神社が数多くあるとともに、雷に関する多様な信仰や言い伝えがある。

宇都宮市平出の雷電神社は、雷のもたらす恩恵や災害に対する防除に霊験あらたかな神社として知られ、県東部一帯の人々から篤い信仰を受けている。主祭神は、別雷大神で京都上加茂神社より勧請したものである。祭礼行事は、年十回を超えるが、特に四月第三日曜日の例祭と七月の第四土曜日の梵天奉納神事がにぎわ

う。

四月の例祭には、個人や各地の雷電講の代表者が参拝に来て、嵐除けのお札を受ける習わしがある。各家では、雷電神社のお札を神棚に供えたり戸口に貼り、雷がもたらす被害を除け五穀豊穡を願う。近年は近隣のリンゴや梨、あるいは花卉栽培農家等、降雷の被害を受けやすい農家の人の参拝も多いという。

七月の梵天奉納神事では、今でも地元平出町から大人用梵天二本の奉納が行われる。梵天は、根っこ付きの孟宗竹の先にビニール紐を房状に取り付けたものである。これを皆で持ち、参道を行きつ戻りつ、途中で上下にゆらし、神社に奉納した後、最後に境内のご神木に縛り付ける。その他に子供神輿の奉納やお囃子の演奏があり境内は終日にぎわう。

これらの他にも以前は、境内の東端の台地と低地の境にある湧水から、日照りが続くと、「お水借り」と称し、水をもらい受け各自の田んぼに注ぎ呼び水とする雨乞いの風習も見られた。近年は雷の季節を前にした六月になると、NTTや東京電力等電気関係の業者の参拝があるという。科学技術の粋を集めた電気機器も雷には弱い。

今年も雷の季節がやって来た。大きな雷鳴に肝を冷やしながらも「雷の多い年は豊作」の言葉を思い出し、「雷様お手柔らかに」と祈らずにいられない。